慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	リチャード・L・ウォーカー著『共産主義下の中國：その最初の五年間』
Sub Title	Richard L. Walker : China under communism, the first five years
Author	石川, 忠雄(Ishikawa, Tadao)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	1956
Jtitle	法學研究 : 法律・政治・社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.29, No.4 (1956. 4) ,p.59- 65
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	紹介と批評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=ANAN00224504-19560415-0059

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

紹介と批評

Richard L. Walker:
China under Communism, The First Five Years
1955. pp. 403. published by Yale University Press, New Haven.

リチャード・L・ウォーカー著
『共産主義下の中國
——その最初の五年間——』

一

中國は、一九四九年十月中華人民共和國が樹立されてから今日にいたるまでわずか數年の間に、そのすべての分野にわたつて著しい變化をみせている。それは、まことに、われわれの豫想をこえた激しい徹底した變化であり、驚異的なものとさえいいうるであろう。しかし、このような變化は、決して偶然にうまれたものではない。そこには、當然このような變化を可能にしたいろいろの要因が存在するはずであり、またそれにともなつて中國內部に解決されなければならない重大な問題も殘されているといわなければならない。

周知のように、中華人民共和國は、中國共產黨の指導のもとに、一九五三年から第一次五ヵ年計畫に着手し、現在本格的な社會主義建設への途を歩んでいる。新中國の社會主義建設が、一九四九年以來の革命の成果を基礎とし、このような變革を可能にした方法と基本的には同一の革命方式にもとづいて遂行されていることは否定しえないところである。したがつて、一九四九年以後數年にわたる新中國の變化の過程と要因とを究明し、その問題の所在を明らかにすることは、新中國の將來、いいかえれば現在行われている社會主義建設の將來を理解し判斷するうえに、重要な意義をもつといわなければならないのである。

エール大學歷史學助教授リチャード・L・ウォーカー氏によつてものされた本書は、このような今日の中國研究に課せられた一つの重要な課題に正面からとりくんだ力作であつて、副題に「その最初の五年間」とあることからも知られるように、中華人民共和國の成立から一九五四年までの五年間に中國共產黨の指導のもとに行われた革命の發展過程を、政治・經濟・社會・外交の各分野にわたつて詳細に檢討し、その特質と新中國に內在するいろいろの問題とを明らかにしようとしたものである。ウォーカー氏自身もその序文で述べているように、新中國で現在行われつつある社會主義革命の成否は、中國自身の問題であるばかりでなく、獨立と近代化とを要求するアジア後進諸國の將來の方向にも重大な影響をあたえ、ひいては西歐民主主義勢力とソヴェト勢力との力關係にも影響するものであつて、著者が本書を執筆した主要な動機もここにあると考えられる

のである。

本書のもつともすぐれた點の一つは、著者の使用している資料の範圍が極めて廣範圍にわたつていることである。すなわち著者は、中共系の新聞雜誌類はいうまでもなく、香港のアメリカ總領事館で入手した調査資料、國府及び第三勢力系の諸材料、ならびにイギリス系の報道などをたんねんに檢討し利用しているほか、著者自ら香港に赴いて中華人民共和國からの亡命者についていろいろの調査を行い、その結果も資料として十分に利用しているのであつて、本書の卷末に附せられた註釋も約八〇〇項目、五〇頁をこえているのである。もちろん筆者は、本書に使用されている資料の評價の方法及び著者の表明している見解のすべてについて、必ずしも意見を同じくするものではない。しかし、それにもかかわらず、敍上の事實からも明らかなように、中華人民共和國成立以後における中國革命の發展過程の綜合的研究として、本書のもつ價値はたかく評價されてよいように思われるのである。

本書は全部で十三章からなり立つている。いまその項目を示すと、つぎのごとくである。すなわち、第一章中國における共產主義の五年間　第二章中國はどのように統治されているか　第三章心理的統制　第四章「運動」の役割　第五章經濟的統制　第六章農民　第七章勞働者　第八章文化と知識階級　第九章恐怖　第十章外交關係の指導　第十一章中國とソヴェト連邦　第十二章中國とアメリカ合衆國　第十三章共產中國の挑戰――がこれである。以下順次にその內容を紹介することとしよう。

二

第一章「中國における共產主義の五年間」は、いわば本書の序說的部分に相當するものであつて、著者はまず共產主義政權によること五年間の革命的變化の一般的目標が、㈠中國の經濟を復興し國家によるその管理を强化すること　㈡共產黨へ權力を集中すること　㈢內外の反革命的要素を根絕すること　㈣軍事力を强化すること　㈤土地改革を完成すること、の五點にあつたことを明らかにしたのち、一九四九年から五四年にいたる各年度について、共產主義政權の行つた主要な內外政策を指摘し、これらの一般的目標がどのように實踐され實現されていつたかを概觀している。すなわち著者は、一九四九―五〇年を「勝利の奔流の年」、五一年を「暴力の年」、五二年を「統制强化の年」、五三年を「縮小の年」、五四年を「決定の年」としてそれぞれ特徵づけ、新中國がソヴェト陣營に屬しつつ、强力な國家權力を媒介として、復興段階から本格的な社會主義建設へ移行していつた革命の展開過程を明らかにし、政治・經濟・社會・國際關係の各分野にわたる第二章以下の分析を理解するための歷史的基礎を提示しているのである。本章の敍述は、簡潔で要領よくまとめられており、クロノロジカルな意味においても極めて有用であるように思われる。

第二章は、このような歷史的理解のうえにたつて、中國共產黨による新中國支配のあり方の分析にあてられている。著者によれば、共產主義中國は、軍事力と警察力とを基礎としたソヴェト型の警察國家であり、その眞の支配者は、中國共產黨中央委員會、とくに毛

澤東を中心としたその中央政治局である。したがつて、すべての重要な政策は基本的にはここで決定されるのであるが、このような中央政治局の支配を可能にし確實にするために、新中國では五つの機構及び要素が存在し、それらが中央政治局の事實上の指導のもとに有機的に結合されてその目的を實現しているのである。その五つの機構及び要素とは、正式の政府組織、共產黨、軍隊、マスメディア及び大衆支持團體であつて、これらは、中央政治局の指示する一定の目的を達成するために、その組織と機能とを通じて統一的に大衆に働きかけ、大衆をその意圖する方向に動員する役割を果すのである。したがつて、新中國の大衆は、つねに一定の方向にのみ動かされることになるのであるが、さらにこのような傾向を保證するものとして、大衆に對する實力——軍事力・警察力とくに秘密警察・裁判所——の行使が擧げられなければならない。著者は、このような立場から、共產主義國家體制に不可缺な、これら諸要素の新中國における現實の機能と實態とについて、具體的に考察しているのであるが、この間の敍述を通觀してとくに注目されるのは、ウォーカー氏が共產黨の新中國支配の一環をかたちづくるものとして、黨・軍・政の三つの組織とならんで、新聞・ラジオ・映畫・漫畫などによる大衆宣傳工作といわゆる人民團體の機能とを重視していることである。このことの重要性は、かねてから認識されてはいたのであるが、それに對する研究は比較的なおざりにされていたのであつて、著者が本書においてこの問題を本格的にとりあげたことは、高く評價されてよいように考えられる。

しかし、これらの諸要素の機能を眞に有機的に結合し、大衆を一定の方向に動員しうるためには、その指導層及び大衆のものの考え方が同一的でなければならない。ここにいわゆる「心理的統制」の必要が生れてくるわけであつて、著者は、新中國における革命的變化を理解する鍵の一つとして、この問題を重視すべきことを強く主張している。第三章はこの問題の究明にあてられているのであるが、著者は、本章ではとくに、大衆的心理强制のもつとも重要なものとして、いわゆる「幹部」が思想的にどのように訓練され養成されていくかを詳細に檢討している。ここに使用されている資料も極めて豐富であり、われわれにとつても未知の部分が多いだけにすこぶる興味ぶかい。

さらに著者は、第四章において、新中國におけるいわゆる「運動」の役割について考察している。けだし「運動」は、「幹部の訓練と同じように、共產黨中央委員會による支配を强化し、この廣大な國土をすみずみまで行きわたるように支配することを容易にする」ものであり、「實際に現在の中國における殆んどすべての重要な仕事は、運動のかたちで行われている」（七七頁）からである。いいかえれば、第二章において著者の指摘した諸要素の機能は、主要な問題については、運動というかたちにおいて結合され、大衆に働きかけていくことになるのであつて、これが共產黨の中國支配とその革命目的の達成のうえに果す役割は重視されなければならない。著者は、このような理解を基礎として、運動の展開されてゆく一般的過程を考察し、ついで一九四九年以降に行われた各種の運動、たとえば、土地改革・婚姻法の普及・抗米援朝・反革命鎭壓・思想改造・三反五反などの諸運動について、その展開過程及び成果を詳細に檢討し、

その結果、結論として「共産黨がその中國支配を行うために用いてきた運動は、明白な不利益があつたにもかかわらず、多くの點で共産主義政權をたすけてきた」（九九頁）として、革命過程における運動の積極的意義をみとめているのである。著者は、新中國の政治過程にみいだされる特徴的諸要素をこのように要約しつつ、その考察の對象をつぎに經濟の問題にうつしている。第五章がすなわちそれである。

三

著者はまず、新中國が現在、ソヴェトの方法にならつて、重工業の建設を中心とする社會主義工業化の途を歩んでいることを指摘しながら、北京政府がこのような本格的社會主義建設に出發するためには、㈠戰爭で破壞された經濟の回復　㈡國家による經濟の統制　㈢計畫經濟における計畫技術の熟達、という三つの條件がみたされなければならなかつたとして、これらの條件がどの程度まで達成されたかを檢討している。それによると、經濟の回復は、一九五二年末において「共産主義政權の期待したよりはるかに遲れてはいた」けれども、「その成果は決して輕視しえない」（一〇三頁）ほどのものであり、また第二の條件についても「一九五二年末までに經濟の國家的獨占の基礎は定められていた」（一〇六頁）のであるが、計畫技術の問題は、これら二つのものにくらべれば著しくその進歩が遲れていたのであつて、一九五三年に始められた第一次五ヵ年計畫は、そのすべてにわたつて順調にすべり出したわけではなかつたのである。もちろん、北京政府が五ヵ年計畫の遂行に關連して當面した困難は、これだけにはとどまらなかつた。たとえば、中國の工業化の成否は究極的には農業生産の增加に依存するのであるが、そこには急激に增大する厖大な人口の壓力と急速に生産を增加しえないという事情が存在していたばかりでなく、資本蓄積の困難、交通の未發達、教育及び技術水準の低位、統計の不正確、などいろいろの問題があつたのである。しかし北京政府は、このような困難にもかかわらず、ソヴェト連邦の援助のもとに、あらゆる手段をつくして、「スターリンの第一次五ヵ年計畫の型にしたがつて中國を工業化しようとするその計畫をすすめている」（一一〇頁）のであつて、このことは當然、新中國の基本的な革命階級である勞働者及び農民、さらには知識分子に對して重大な犧牲を要求するものといわなければならない。かくてウォーカー氏は、このような立場から、六、七、八の各章において、新中國における前記諸階級の現實の地位について、分析を行つているのである。

すなわち著者は、まず農民の問題について、一九四九年以後における土地改革の展開過程と、それが次第に協同化へ發展してゆく過程とを詳細に檢討し、社會主義建設の當然の要求である土地の協同化と政府による農産物の强制的購入に對して農民の不滿がたかまりつつあることを明らかにし、さらに勞働者に關しては、公式には新中國の指導的階級として優遇されているようにみえるけれども、實際には、勞働時間・賃銀をはじめ、その勞働條件は改善されてはいないのであつて、勞働模範の制度や生産競爭による勞働强化も行われ、常時勞働者總數の二〇％程度の失業者も存在する實狀であり、したがつて、「中國の勞働者は、農民と同じように、共産黨によつて

欺かれた犠牲者であることを自覺しはじめている」(一七五頁)と著者は明確に結論づけているのである。著者のこのような見解は、今日のアメリカにおける中共研究にはしばしば見出されるところであり、とくに目新しいものではない。たしかに、新中國において、著者の指摘するような事實は存在する。しかし問題は、それが果してどの程度まで一般化しているか、また一般化しうるであろうかということであり、この點についてはなお愼重に檢討される必要があるであろう。

著者は、第八章においては、勞働者・農民について、新中國における文化思想統制及びそこにおける知識分子の地位について檢討を加えている。ここでは、主として、共產黨における整風運動、少數民族問題、宗教——佛教・道教・キリスト教に對する——問題、新聞出版の統制、教育、思想改造、などの諸問題が考察の對象とされているのであるが、ウォーカー氏は、これらの考察をつうじて、いずれの問題に對しても毛澤東を頂點とする共產黨の意向が强力に反映されており、それらは、結局のところ、(一)共產黨による完全な統制 (二)共產主義への歸一 (三)「望ましからざる影響」の排除 (四)マルクシズム的民族主義を中核とする愛國心の創造 (五)ソヴェト連邦の經驗と方法の適用、という五つの目標を實現しうるように實施され、「この五年間に中國の文化と知識分子は全體主義的教說に服從するようになつてきている」(二一三頁)ことを明らかにしているのである。

そこで問題になるのは、以上に述べてきたような中國の急激な國內的變革を一應成功にみちびいたものはなにか、ということである。著者はすでに、この問題について、その主要な原因の一つが共產黨中央委員會による大衆の心理的統制にあることを指摘しているのであるが、さらにこの心理的統制を非常に有效にしたものが、人民にうえつけられた「恐怖」觀念であつたことを强く主張している。第九章はこの問題の分析にあてられているのであつて、著者は、主として、土地改革及び反革命鎭壓の過程をつうじて、共產黨による實力の行使がいかに徹底的且つ廣汎に行われたかを概觀し、そこに見出される奴隸勞働、肅淸、拷問、投獄などに對する恐怖が、人民を共產黨の統制支配に服從させるうえに大きな役割を果していることを具體的に論證しているのである。したがつて、この意味においては、中華人民共和國は、ソヴェト連邦と同樣に、もつとも徹底した警察國家の一つであり、そこには國家權力による共產黨の人民支配が存在するのみであつて、いわゆる民主主義とはまつたくほど遠い存在であるといわなければならない。ウォーカー氏の新中國觀の基本的立場も、ここにあるといつて差支えないように思われるのである。

四

新中國の對外關係の在り方が、政治・軍事・經濟などあらゆる分野にわたつて、中華人民共和國の革命過程に重大な影響をもつていることは、容易に理解されるところである。かくて著者は、十、十一、十二の各章において、新中國の外交の一般的性格、中ソ及び中米關係について考察を加えているのであるが、それによると、まず新中國の外交の背景に橫たわつている主要な特徵として、つぎの三

つが擧げられなければならないとされている。すなわち、㈠共産主義政權がその領土内のあらゆる現象を外部に示す場合、その表現はすべて政府によつて獨占された公式なものであつて、西歐諸國の場合のように非公式な私的な見解の表明というようなものはなく、これが共産主義政權の外交に統一的な性格をあたえていること　㈡新中國は完全にソヴェト連邦の陣營に屬し、根本的には資本主義諸國と對立することをたてまえとし、いわゆる「第三の道」はないという見解をとつていること　㈢國内問題と國際問題とを階級鬪爭に關連させて不可分の關係にあるものと考えていること――の三つがこれであるが、ウォーカー氏はさらにすすんで、このような一般的特徴のうえにたつ新中國外交の具體的展開過程を分析し、その目標が、㈠世界における五大國の一つとしての地位を獲得する　㈡アジアにおいて指導的役割を果すようになる　㈢アジアに緊張狀態をつくりだすことによつてその國内的弱點をカヴァーする　㈣一二〇〇萬以上の華僑を支配する　㈤アジアにおいてその影響地域及び支配地域を擴大する　㈥帝國主義諸國からはもちろんソヴェト連邦からも新中國が完全に獨立していることを表示すること、にあつた事實を指摘し、さらに新中國の將來を決定する重要な問題の一つである中ソ關係の分析にうつつている。

著者は、第十一章において、過去五年間における中ソの關係が、數多くの問題をふくみながらも、政治・軍事・經濟・社會・文化の各分野にわたつて、緊密化への熱心な努力によつてうらづけられてきたことを明らかにしているのであるが、本章の敍述をつうじてとくに注目されなければならないのは、著者が、㈠新中國にはチトー化する傾向は全く存在しないこと　㈡「毛澤東政權をソ連におしやつたのは西歐側の反對ではなく、その弱さと共産主義制度の組織・教義及びその殘忍さであり、……鐵のカーテンの外側にある世界の統一と力と決定的反對こそ、その教義の妥當性と、ソ連邦との同盟によつてえられる將來の疑わしい利益とを中共の指導者に再考させるもつとも有效な手段である」（二九九―三〇〇頁）ことを確信している事實である。ここに示された中共のチトー化論に對する分析は、今日までにとなえられた殆んどすべての論點を網羅し、その一つ一つについて論據を擧げて反對意見を展開しているのであつて、その努力は多とされなければならない。また第二の見解は、現在のアメリカにおいて、もつとも支配的な意見であり、とくに目新しいものではないが、やはりアメリカの對華政策の基本をなしているという意味において、注目される必要があるように思われるのである。

中ソ關係と對照的立場にあるのが中米關係である。中華人民共和國は、過去五年にわたつて、アメリカをもつとも重要な帝國主義國家として攻擊し、アジアにおけるアメリカの孤立化を主要な外交目標としてその實現につとめてきた。第十二章は、主としてこのような中米關係の歴史的過程の檢討と臺灣問題をめぐる諸情勢の分析とにあてられているのであるが、内容的には、ここでとくにとりあげなければならない問題は見當らない。

第十三章「共産中國の挑戰」は、本書の結論的部分に相當する。ウォーカー氏は、まず、共産主義政權の性格について、㈠本來的に好戰的性格をもつものであり、今日となえられている平和的共存は單なる戰術にすぎないこと　㈡「共産主義的支配は欺瞞と不正直と

にもとづく」(三二三頁)統治であり、中共政權は權力が增大するにつれてその腐敗も增加していること ㈢それは人間生活のあらゆる面をその統制下におこうとする要求をもつていること ㈣中共政權は新しい型の東洋的專制政治の基礎をつくり出していること――を明らかにしたのち、このような專制的支配は、人民の支持を失い、その抵抗をまねくものではあるが、歷史的先例からも明らかなように、それほど短期間に崩壞し去るものではないことを指摘している。いずれにしても、共產主義政權の本來の性格である對外的膨脹は、斷乎として阻止されなければならないし、共產主義政權そのものの崩壞も望ましいことであることはいうまでもない。この場合、その目的を達成する手段として考えられるのは戰爭であるが、これはなんとしても避けなければならない。したがつて、「政治家、學者及び思慮深い國民に課せられている重大な義務は、新しい共產主義的專制政治の性格を理解し、できうればその權力を內部的に崩壞せしめうる弱點を發見する」(三二六頁)ことであり、アメリカ合衆國は、アジアの非共產主義國に對して共產主義的專制政治の實態を理解させ、積極的に援助をあたえることによつてアジアを貧困と無知から解放し、かれらに共產主義にかわるべきものをあたえなければならない。これは非常な費用をアメリカに要求するものではあるけれども、「共產主義國の挑戰に應ずることに失敗した場合の犧牲にくらべれば大したものではない」(三二七頁)といわなければならない。かくて著者は、アメリカ合衆國の確固たる對華及び對アジア政策の樹立を主張しているのである。

以上が本書の概要である。つぎに本書を通讀してえた筆者の總括的な感想を述べてこの紹介を終ることとしよう。

本書が、この種の問題をとりあげたものとして、非常な力作であることは、正當に認められなければならない。しかし、この書物を一貫して感じられることは、いろいろの問題をとり扱うにあたつて、いわゆるアメリカ人的見方が非常に强いということである。たとえば、アメリカにおいては、共產主義の問題を理解する場合に、共產黨による權力的支配、人民に對する抑壓、人民の反抗、という劃一的な圖式によつて問題をとらえ、これをあらゆる共產主義國にそのままあてはめることによつて議論をすすめていく傾向がつよいのであるが、果してこのような方法だけで現在の中共政權と人民との關係を一般的に理解しうるかどうかは疑問であるといわなければならない。本書にもこのような傾向は隨所に見出されるのであつて、このことが各種の資料を評價するに際して、その判斷の內容に大きな影響をあたえているように考えられるのである。いずれにしても、われわれは、西歐的感覺もしくは西歐的生活水準をはなれて、過去における最惡の生活環境と歷史的條件とを變革した中國人の意識を、中國人の立場に立つてとらえることが必要であるように思われるのである。

(石川忠雄)